

音 今 の 黒 崎 町 の

新聞からたどる黒崎の歴史 (五十四)

双葉山、羽黒山から大相撲大野巡業まで

昭和十四年の春場所では、大勢の双葉山ファンが国技館の周囲を埋めつくし、夜の十時に客を入れた。

(先月号からの続き)
名横綱双葉山の人気の秘密を次のエピソードによって紹介する。

エピソード (元歯科医から相撲アナになった小坂秀二著より)

昭和十一年春場所(一月)七日目から勝ち続けた双葉山は、まるで負けることを忘れたように勝ち続けた。これは三年前の双葉山からはとても想像できないことだった。それまでの双葉山は、年も若かったが、体にも恵まれておらず、七年春場所に起きた春秋園事件で大量の力士が脱退した後の穴埋めに、二十歳の時十両から幕内に抜擢されたのだというが、実力はまだまだ地位に及ばなかった(入幕の時双葉山の体重は九十二kg)。その後の数年間が双葉山にとって最も苦しい時期だったが、十年夏場所の巡業中から「双葉山が大きくなり強くなった」という噂が東京にも聞こえてきた(このころ双葉山は百七十八cm、百一十四kgと体重も増し、当時の幕内の重量級となっていた)。十一年春場所七日目から連勝を続け、十四年春場所まで、足

かけ四年間まるで負けることを忘れたように勝ち続ける双葉山を、人々は、この先この大記録をどこまで伸ばすのだろうか、驚きと賞賛の目で見守っていた。そんな中、十四年の春場所が一月十五日から始まることになった。ところが、その前日の夕方から大勢の強烈な双葉山ファンが国技館の周囲を埋めつくし、協会ではこの冬の寒空のもと、外で客を待たせておくわけにもいかないで、夜の十時に木戸を開けてやった。観客は何もやっていない館内にどっとなだれこんだ。前代未聞の相撲人氣である。あの名力士栃錦、若の花、大鵬、千代ノ富士、現代の人氣力士若ノ花、貴ノ花においてもこの双葉山人気にはとても及ばない。

また、こんなこともあった。春場所が始まり、初日の相撲を見た観客が家に帰らず、そのまま国技館のまわりに座りこんでしまう。夏場所の五月ならまだよいが、正月の春場所である。いくら熱狂的な相撲ファンでも寒さにはたまらない。そこで近所のごみ箱を燃やして暖をとる

連中が現れた。当時のゴミ箱は全部木製で、黒いコルタールが塗ってあったのでにおいは臭いが暖はとれる。ゴミ箱を燃やされた家では最寄りの本所警察署に訴え出る。巡査が出てきて監視するという騒ぎになる。それはど人気があった。人氣の源は双葉山だったのである。

場所前一般の相撲ファンは、この場所も双葉山の優勝を信じて疑わなかった。来る場所も来る場所も双葉山というのでは、ファンも飽きただろうと想像されそうだが、当時そういうことはなかった。たしか、のちになつて大鵬が余り強すぎて優勝し続けた時には、そういう空気があったし、柏嶋で盛り上がった相撲人氣も急速に萎えていった。これは双葉山と大鵬の違いもさることながら、時勢の持つ強さも大きかった。当時日本は軍国色一つに染められ、皇軍は

無敵であり、無敵の象徴が双葉山だったのである。戦争は嫌で、兵隊に取られるのを嫌った国民にしても、双葉山の相撲には無条件で拍手を送っていたのである。双葉山が勝ち続けることがだんだん暗くなっていく世の中にあつて、国民の夢であつた。そんな双葉山の連勝記録にストップをかけたのは、平幕の安芸ノ海だった。

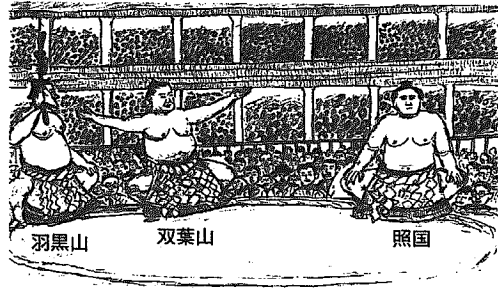
動員だった。体がもとの力士にとって食糧不足は深刻な問題であつた。特に老境に入ってきた力士や病氣、けがをした力士たちは回復力や、維持力が甚だしく落ちた。勤労働員や、慣れぬ労働は力士たちの体を痛めた。部屋、一門の責任者はこれらのことだと思ひのほか心身を消耗していった。

余談になるが、この世紀の大一番を西の花道の一番後ろの方で伸び上がるようにして目を輝かして見ていた一人の少年力士がいた。春日野部屋の新弟子でこの場所初土俵を踏んだ大塚である。部屋の幕内力士鹿嶋洋が横綱男女ノ川と顔が合うため、支度部屋で待っていたためにこの相撲が見られたのである。「初土俵の場所であの相撲が見られたのですから幸運でした」と語るのですから、大塚改め栃錦のちの春日野親方である。

昭和十四年春場所七十連勝ならず、翌十五年夏場所は、終盤にかかる前に予想もしなかった四敗を喫した双葉山は、あの有名な「信念の歯車が狂った」の言葉を吐いて引退を表明した。事態に驚いた協会幹部が総動員で慰留に努めた結果、引退表明は引つ込め休場することで収まったが、一時は、これで名力士双葉山を二度と見られなくなるかと思われたと小坂氏は述懐している。

十九年に入ると、戦局はもうどうにもならないところまで落ちてしまった。相撲界にとっての大きな変化は食糧不足と勤勞

十九年二月には国技館が軍に接収された。当時は秘密だったが、風船爆弾の製造工場になつていたのである。国技館が使えなくなったので、十九年夏場所と秋場所は、後楽園球場で晴天十日間の本場所を開いた。国技館以外で本場所を開いたのは、関東大震災のあと国技館が使えず、名古屋で開いて以来二十一年ぶりのことであつた。また、秋場所を開いた理由は、翌年の春場所を開こうにも、一月の寒い中を野天の興業はできにくいことから、繰り上げて秋にやつたもので、秋に本場所が開かれたのは昭和七年以来十二年ぶりのことであつた。十九年には年間に三回本場所が開かれたのである。二十三年三月の東京大空襲では国技館も焼けた。その時風船爆弾工場も壊れてしまったので、二十年夏場所は六月七日から屋根が壊れている国技館で行われた。雨の日は使えず晴天七日間、十両以上だけの取組で非公開、奉納相撲の形をとって貴賓席に神殿を設けた。戦争による傷病兵だけが招待された寂しい本場所であつたが、よくこの時期に開かれたものである。(続く)



双葉山の引退土俵入り